

朝日 歌壇 俳壇



〈ひらいててもコブシ〉 北村さゆり

俳句時評 石田波郷新人賞を読む 岸本 尚毅

石田波郷新人賞の授賞式が先月、江東区砂町文化センター石田波郷記念館で行われた。三十歳以下を対象とする二十句の競作。選者三人も五十歳以下で、俳句の賞としては比較的若い。

応募は百二十九篇。正賞は二十歳(受賞当時、以下同じ)の辻村栗栞。受賞作の一つ〈茶の花や寮生が掃く寮のまへ〉は学生寮のたたずまい。〈寄居虫や灯台の絵を売り暮らす〉は海辺の町に住む人物。自分で描いた絵を街頭で売ることか。

〈小名木川夜景のなかを細く牙えは下町の古い運河の景。夜景のなかを細く牙えは、景の細部を略しつつ東京の近代を叙情的に捉えた。もしかすると、久保田万太郎の〈神田川祭の中をながれけり〉にヒントを得たのかも知れない。

準賞の篠原圭太は二十二歳。〈かなかなや鏡割尽きて瓶に粉は些事を詠みつつヒグラシの声に感興を見出した。準賞の堀内晴斗は二十歳。〈木の棒が氷菓の中に透けてる〉は素朴な眼差し。賞創

設の功労者の名を冠した大山雅由記念奨励賞の伊藤真清は二十三歳。〈秋めくや墨絵に白き屋のある〉の巧みに驚く。

選者の西村藤樹は、波郷に作品が似ていなくても、波郷のような熱い心や高い志を持った作者は大歓迎だといふ。

この新人賞は東京都清瀬市の事業として発足。諸事情により二〇二三年に終了したが、この第十六回から江東区主催で再開。波郷が結核の療養をした東京病院のある清瀬市から、波郷が十余年暮らした北砂町のあった江東区へ。波郷にゆかりの両自治体の間で波郷新人賞が継承されたことを喜びたい。

(俳人)

◆5月3日付の朝日歌壇俳壇面は休載します。

第70回現代歌人協会賞 小原奈美さんの「声影記」(港の人)と貝瀬駿一さんの「ダニー・ボーイ」(本阿弥書店)に決まった。

第24回前川佐美雄賞 ながらみ書房主催。日高寿子さんの歌集「日在浜」(角川書店)に。

第34回ながらみ書房出版賞は屋良健一郎さんの歌集「KOZA」(ながらみ書房)に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかは1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

めんどくせえ!ロックな母さんやりたくて米津玄師のポリューム上げる松戸市 遠山 絢子
いつもより少し早めに家を出るゆっくりに歩く
退職の朝 (川越市) 小澤 操
ママが開く湖面のファスナー 鴨の子ら素直に列なし追いかけて行く (西海市) 前田 一揆
野にひとつ築山ありて広場てふ津波避難に逃れ来る丘 (山武市) 伊藤 日史
これからは正念場なり生活の全てが病院9階の部屋 (岩国市) 木村 桂子
桜など知らぬ間に散る職員室は新年度準備の去る人来る人 (高松市) 中村 将人
春休み早く終われと思いつつ昼のマックに席をさがしぬ (神戸市) 長尾 佳子
ぬはたまの闇の中からひさかたの光の中へ麻酔から覚む (八王子市) 額田 浩文
期定を終えしブルーンの枝元に集まり始む黄色のマヒワ (五所川原市) 戸沢大二郎
ゴミ分別二十種類の市に住みて誠意の仕分け頭の体操 (羽村市) 吉原 恭子

【評】第一首、上句のしゃべり言葉に注目。米津玄師は一九九一年生まれのシンガー・ソングライター。第二首、長かった勤務時代を思っの最後の出勤である。第三首、母鴨を先頭に湖面を泳ぎゆく鴨の親子。「湖面のファスナー」、うまい。

侯野氏の歌に叱られ熱量を上げて反戦デモに加わる (朝霞市) 岩部 博道
野球なら27死で終わりだがガザ、ウクライナそしてイランは (さいたま市) 大浦 健
隣臓糖衣服したとインシユリ注射射待て花見に来た友 (東京都) 村上ちえ子
☆花びらの滞空時間は飛距離とは比例はしないそれがまたよい (逗子市) 久家 雅子
トランプ氏の停職発言揺れ続き毎日が万愚節のお人 (岐阜市) 木野村暢彦
ノ一言える友いることの幸せを思えりきつといないトランプ (観音寺市) 篠原 俊則
☆大人びて見えた卒業式のち入学式の吾子は幼き (奈良市) 山添 聖子
芦ノ湖で娘買い来て四十年マリモはわが家でひっそり生きおり (鹿嶋市) 津田 玲子
ぽっかりと南の空に寝待ち月アルテミス2号どの辺り (宇都宮市) 菱沼 芳子
べんとうの上に花びら落ちてきてキョハハア毛虫だぞとすするほく (岐阜市) 青木 文哉

【評】1首目、4月5日付の本欄の歌「熱量の少ない国になって来ぬ学生運動もデモも少なく」に答える歌。2首目、大量殺戮の止まない世界の現状を嘆く。3首目と4首目、それぞれ花見どきの楽しさを詠う。10首目、作者は小学5年生。

多忙ゆえ職場で書けず家で書く働き方改革レポート (金沢市) 竹内 一二
病棟の献立表には載っていない流動食が今日から始まる (安中市) 早瀬 裕昭
AIの新人社員が入社式で自己紹介する時代になった (京都市) 中尾 素子
マクロンに抱きつかないのはなぜだろうEU監視と思われないか (八千代市) 井上 正則
春の夜に昔を語る居酒屋で友がぼつりと一成田で一言 (大和郡山形市) 四方 護
座布団の対角線に収まりし小さき赤子二十歳に羽ばたく (大崎市) 千葉実千代
ヒトよりも七倍早く老いること知らぬ腫で尻尾振りおり (東京都) 椿 泰文
☆花びらの滞空時間は飛距離とは比例はしないそれがまたよい (逗子市) 久家 雅子
軍艦島探め来たりし初つぼめ古果の修理に取り掛かりおり (西海市) 前田 一揆
「それよりも勉強しろ」と言てられ「結婚しろ」と急かされた世代 (東京都) 上田 結香

【評】竹内さん、働き方改革のレポートを、職場ではなく家で書かなければならぬ肉。まさに改善の必要が。早瀬さん、みんなと同じ食事をとれるようになるまでの我慢。中尾さん、もうすぐ新入社員がAI社長の訓示を聞く時代になるかも。

くしゃくしゃのレシート愛しに在りし日の15時2分に「餅」を買った父 (日光市) 保里 紗穂
急逝をたまた受け止めよ春の城花八分にて動かざりけり (富士市) 村松 敦規
乗り換えの十分間できしめんを喪服の男は汁までですする (富士宮市) 高村富士郎
生きてきた重み感じる病室のカーテン越しの咀嚼の音よ (印西市) 小野 文香
この島に核のゴミ捨てに来るのかと白砂に混じる伯父の骨問う (鎌倉市) 小笹岐美子
満員でつり革奪い合う電車水くれ、という兵士にも似て (京都市) 好木陣太郎
菜の花は取り締まりするパトカーも包んで咲いてあり余る春 (佐伯市) 河北 苗
☆大人びて見えた卒業式のち入学式の吾子は幼き (奈良市) 山添 聖子
「木と書いてしず」と読む名のばあちゃんには樹木のように百才になる (水戸市) 佐藤恵美子
押されつつ電車を降りて首もとのボタン留めれば四月一日 (東京都) 柳沼 智景

【評】一首目、レシートの時刻や品目のリアルさが哀しい。二首目、訃報を知った瞬間桜が、世界が静止する。三首目、喪に急ぐ男の空腹の姿がいかにも生きている。五首目、核のゴミの処分地候補地南鳥島では第二次大戦中二百人近い戦死者がでた。

佐佐木幸綱選

高野公彦選

永田和宏選

川野里子選